

行革の突破口を開く

金井元彦

兵庫県、特に神戸市から阪神地域にかけては香川県出身者がかなり多く居住していて、これらの人々は香川県人会を結成してなかなかよくまとまっている。私は兵庫県人だが、かつて香川県に在勤したことがあるというところで会員並に扱われ、会合には何時もお招きを受けていた。

大平さんはこの会合に努めて顔を出しておられたが、池田内閣の官房長官になられてからは、この県人会では早くも大平総理待望論が強く打ち出されるようになってきた。私は郷党間における大平さんの人気は大したものだということを毎回感じ入っていたが、総裁予備選挙の際もこの人達は非常に熱心に活躍をされたのであった。

私が兵庫県知事時代、特にお世話になったのは、大平さんが通産大臣をしておられるとき、姫路市に出光石油の精油所を建設する件であった。これは姫路地先の埋立地に造るものであったが、漁民の一部から公害問題について設置反対が起り暴力沙汰が出るなどかなりもめ続けたものであった。大平さんのこの問題に対する態度は極めて慎重綿密であったが、事態の真相を把握され、許可についての決断を下されたのであった。これによってその後なんらのトラブルもなく事態は円滑に進行し、地域の発展に大きく寄与したのであった。

昭和四十六年の参議院議員選挙に私は勧められて出馬することになった。ところが情勢の読み違いか、党の公認問題が一向に進展しないので、演説会における有力応援弁士を得ることができず、陣営の士気が盛り上がらなくて困ったことがあった。私は大平さんに香川県人会のよしみで個人的に応援にきていただけないかとお願いし

たところ、幹事長の了解があればということで打ち合せをされ来援していただいたことがあった。これでどうやら格好がついて運動の方も軌道に乗ってきたのであった。当時としては、私にとってまことにありがたい次第で深く肝に銘じたことであつた。

第一次大平内閣で私は行政管理庁長官に任命された。行政改革は歴代内閣が必ず組閣の際に提唱し、しかもほとんど成果らしい成果を挙げ得ないのが実情であつた。大平さんは組閣当初、行革については徒らな機構いじりでごたごたするよりも、実質的效果を挙げることに重点を置くようにというのが考え方の中心で、その線に沿つた閣議了解を策定して実施に移したのであつた。ところが、財政再建に関連して一般消費税が七月（五十四年）の総選挙において強い拒否反応に遇うと同時に、財政再建の大前提が行革にあるような世論が形成されてしまつた。従つて内閣としては政治姿勢としてまず国民の眼に映る行革の断行をしなければならぬ情勢となつた。そのためには機構の整理は避けて通れない問題であり、私はその準備を整えたのであつた。

第二次大平内閣は、冒頭特殊法人の大整理を決定し世間にその姿勢を示されたのであるが、私はこの時の大平さんのやり方はまことにみごとであつたと思うのである。それは西村副総裁とご相談の上らしいが、組閣に際して行革実行について各大臣の同意を取り付けられたことである。従来行革の不発は主管大臣の現状固執であつた。行革課題を抱えた各省大臣が実行責任者となるのと反対側に立つのとは雲泥の相違であることは明らかで、各論反対を事前に封じたやり方はまことに的を射たものであつた。大平行革が成功の突破口を開いたという点は高く評価さるべきことと思うのである。大平さんの政治には哲学的背景と理論構成を持ち、実行に当つては慎重着実であり変化に対する柔軟性があつたように思われる。大平政治実現のため、待望の安定多数を死をもつてあがなわれたことに思いをいたすとき、涙なきを得ない想いである。

（参議院議員・第一次大平内閣行政管理庁長官）